

■ 発達障害の高校生のうそ

「なぜ言葉のか、理解を」

発達障害のある高校生がつくりには想像する力の乏しさが大きく影響しているとの分析結果を、花園大の橋本和明教授（臨床心理学）らがまとめた。追及ばかりでは生徒を傷

つけ、したすりに周囲との繋を深めてしまつとして、教員や保護者は「障害の特性を踏まえ、なぜ言つのかを先に理解した上で対応する必要がある」としている。（鈴木雅人）

うそに着目した発達障害の研究は珍しいという。障害のない生徒と比べてうそをつく回数が多いわけでないが、内容が異なるひとでメカニズムを調べた。「京都私立中学高校連合会カウンセリング研究会」で報告された事例などを分析、守山市スクールカウンセラーの村上沙代さんと共著で冊子「高校生の発達障害」を7月に発行した。

ある教員に「金は貸し借りしていない」と説明する一方別の教員には「千円だけ借りた」と回答した。先生同士が相談すればすぐ事実が判明するのに想像がおよばない、「他者視忘れていたうそ」の一例だ。うそをその類型に分け、23事例を示して紹介していく。

発達障害の想像力の乏しさや他者とのコミュニケーションの困難さが大きく影響するなど、事例を通して指摘。

正しい想像力／追及だけでは…

花園大・橋本和明教授らが分析

教員や保護者には「まず聞き役に徹してうそを言う背景を探り、その上で対応を選択する必要がある」と助言する。

例えば、授業を受けたくないため体調不良を装う生徒には、うそを事実として受け止めた上で「病院へ行こう」などと勧め、うそをついた結果がどうなるかの見通しを体験させる。

友人を突き飛ばしたと指摘されて「冗談でたたいただけ」と反発した事例は、事態を客観視できず、うそだと自覚がない可能性がある。突き飛ばしただけでなく、友人がどう感じたかを「事実」として説明し理解してもらうことが有効なケースだとする。

橋本教授は「うそを切り口にして、社会への対応力そのものが上がるところ、周囲の対応によって導くことができるのではないか」と強調する。冊子は橋本教授のホームページ <http://k-hashim.net> からダウンロードできる。

▲ 「周囲とのつながりを持ったいじめの気持ちを理解した上で指導すれば、不適切なうそは減つてくる」と助言する橋本教授（京都市中京区・花園大）

